



HAL
open science

日常会話の驚きを表す定形表現について：予備分析

Alexis Ladreyt

► To cite this version:

Alexis Ladreyt. 日常会話の驚きを表す定形表現について：予備分析. [Research Report] Université Grenoble Alpes; Université de Tsukuba. 2019. <hal-02158430>

HAL Id: hal-02158430

<https://hal.science/hal-02158430>

Submitted on 18 Jun 2019

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire HAL, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

日常会話の驚きを表す定形表現について : 予備分析

I. はじめに : 博士研究について

定型表現の語用論的研究は、四半世紀にわたり言語学者の注目を集めてきた。定型表現の分野においては比較的新しい分野であり、慣用表現の語用論的機能や対話機能との関係性について、分脈や会話の目的、話者の特徴などの発話が行われる状況を考察しながら研究されている。この研究分野の主な目的は語用論的定形表現の機能とコミュニケーションで発生するあらゆる状況との関係性を特徴づけることである。たとえば、「*tu vas voir ce que tu vas voir !*」 (*Acte de langage stéréotypé*, Kauffer 2017)、または「*il y a anguille sous roche*」 (*Routine conversationnelle*, Klein et Lamiroy 2016) における発話の意図は、前者は威嚇、後者は疑念であるが、文字通りの直接的な解釈では意味をなさない。これらは語用論的機能が働いている文例と言える。語用論的機能を持つ日常会話定形表現は2つの見地から研究される。一つはこれらの言語形式の特性を明らかにすること、そしてもう一つでは語用論的機能と異なる言語外 (*extralinguistique*) のパラメーター (韻律、話者間の関係、文脈、ジェスチャーなど) を研究することである。

外国語教授法におけるコミュニケーション能力に関する近年の注目度の高さは、語用論的定形表現の研究の発展に大いに貢献している。定型表現の構造や文化、特有のコミュニケーションに応じた言語運用をどのように教えるかという問いは、第二言語習得における研究の中心となった。また、それらの研究は複雑な定型表現の構造を学習者がより無理なく学習できる教授法の開発へと応用されてきた。

II. 本発表の目的

本研究の目的は、主に話者の状況または文脈において生じる驚きを表現する言語機能について考察する。それらを評価・反応に関する語用論的表現の下位分類に属する系統的な研究に基づいて、語用論的機能である定形表現の構造および言語運用方法を明らかにする。本発表では、「on croirait rêver !」という表現について言及する。この表現はコーパスにおいて出現率が高く、意味論的な曖昧性が大きい（non-compositionnalité）との理由で選出した。コーパスの利用によって、この表現に関する複雑な言語構造の特徴を示すことが可能となる。

特に、評価、反応、価値(ポジティブ／ネガティブ)の概念の検討により、語用論的機能を持つ定型表現下位分類に属する表現の使用における言語的認知過程（評価 → 反応 → 発話 → 受け手に影響掛ける/illocutoire）をモデル化することを目標とする。

III. 本研究の表現の特徴

上述したように、この発表で研究されている表現はコミュニケーションの状況に関連する話者の精神状態を表現しており、このタイプの表現は語用論的機能を持つ定形表現の下位分類に属している。驚きを表す語用論的機能がある定形表現は、次のように特徴付けられている：

- i. 驚きを表す語用論的機能がある定形表現には、特定の統語的自律性が与えられているが、補完によって拡大することもできる(insertion d'un complément)。
- ii. 驚きを表す語用論的機能がある定形表現には、多少のバリエーションは認められるものの、構文上の定型性があり、日常的に繰り返される談話表現に属している。その表現は、頻繁に日常会話やタメ語などによる談話で観察される。
- iii. 驚きを表す語用論的機能がある定形表現は、一般にいくつかの語彙単位で構成され、感嘆符がついている（感嘆符の使用はコーパス上でよく観察される）。
- iv. 驚きを表す語用論的機能がある定形表現は、話者の感情を表す反応的言語行為(Searle, 1985)である。それらは各状況において発話者が知覚している状態を示す。
- v. 驚きを表す語用論的機能がある定形表現は、価値論的（ポジティブまたはネガティブの価値を与える）および評価的な要素を提示する。
- vi. 驚きを表す語用論的機能がある定形表現は、特定の相互作用および談話的な機能を有する（承認、自己主張の修正、テーマの紹介、談話のモダリティ化など）。

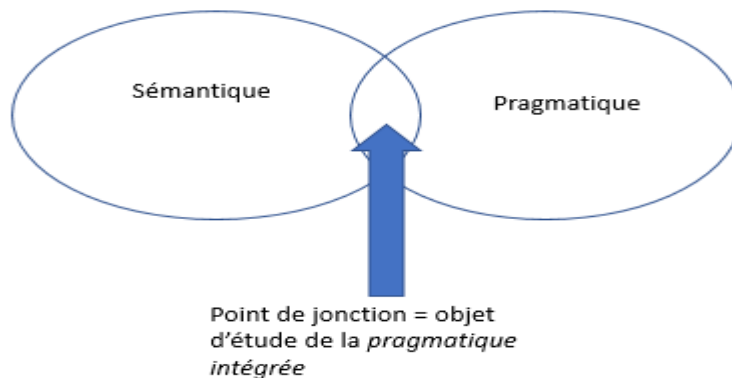
- vii. 驚きを表す語用論的機能がある定形表現は、その表現に付与された価値およびその状況に関する話者の感情を表す言語行為のニュアンスを解釈することはコミュニケーションにおいて重要な文脈と本質的に結ばれている。

IV. 理論的概要

1. *Pragmatique intégrée* 理論について (Ducrot, 1980)

1980年代に Oswald Ducrot によって「*pragmatique intégrée*」の概念が生み出された。この理論によれば、文の解釈は文脈情報を用いて会話の内容とその対話者が伝えた談話の目的を再構築する過程を経て成り立っている¹。したがって、「*pragmatique intégrée*」は、意味論と語用論を組み合わせた観点で言語現象を分析する。これは、指示的意味（意味と実際の状況の関係）と語用論的意味（話者と対話者との文脈の関係）の関係を分析することを含むのである。

さらに、この理論によれば、Ducrot が「*Sui référence*」と呼ぶものの中で、その文脈によって意味が修正されている。Ducrot が言うように、「*Sui référence*」が« *le sens d'un énoncé est une image de son énonciation* » (Ducrot, 1980) という事実を指している。したがって、発話の理解はその発話の文脈の状況と強く関連している。



2. *Déformabilité* 理論について (Mélis, 2013)

この概念は Culioli (1990) および Mélis (2013) によって提唱され、表現を使用した状況や発話者の意図に応じて、同一構文においてもその意味が変化するという発話内における意味の柔軟

¹ « [...] chercher dans la situation de discours tel ou tel type d'information et de l'utiliser de telle ou telle manière pour reconstruire le sens visé par le locuteur » (Ducrot 1980 : 12)

性が強調されている。したがって、Culioliによれば « la déformation est une transformation qui modifie une configuration, de sorte que certaines propriétés restent invariantes sous transformation, tandis que d'autres vont varier » (Culioli 1990 : 129)。

同様に、Melis は次のように語っている:

« La signification est l'invariant sémantique de la phrase. C'est parce que l'énoncé signifie E qu'il peut produire une gamme de sens selon certaines déterminations pragmatiques. Cette gamme de sens se construirait par inférence à partir de cette signification de base, dans un raisonnement du type *étant donné que cette phrase dotée de signification est prononcée dans telle circonstance, elle a telle interprétation contextualisée.* » (Melis 2013) 。

したがって、文の意味の解釈は表現が使用される文脈によって変化する。たとえば、この概念を説明するために「Les carottes sont cuites」という表現を例に挙げると、その中に3つの用法を確認することができる:

- 例 1: 指示的用法 → ニンジンが実際に調理されている(食事を準備する文脈)。
- 例 2: 慣用的用法 → 状況が話者にとって不利になり、それについて何もできないときに使用される。文脈の例: 話者は試験を終えたばかりだが、修正できない間違いに気付いて: 「Les carottes sont cuites ! 」と言う。
- 例 3: 暗号化用法 → 話者間で情報共有がされている状況では、「Les carottes sont cuites」と言える。この場合当該表現は暗号化されたサインの使用となり、発話者およびその意図を共有する者だけに知られている出来事の発生を予期させる。

3. 評価と価値論の概念について

評価と価値論は、驚きを表す語用論的機能を持つ定形表現の使用に関する大きな2つの言語概念である。

a) 評価について

評価というのは、社会的、倫理的または感情的なパラメーターとの比較に基づく判断の結果として、対象に属性を与える精神的操作である。評価は主に、社会で確立された従来の基準（社会的適切さ）、専門分野に基づく基準、主観的規範(話者の個人的価値による)などの基準に基づいている。例えば:

を表す言語行為は、主に精神状態や文脈の状況に応じて生じる感情を表現する。それらの言語行為は主観的であり、感嘆文の中で多くみられる。

話者の感情を表す言語行為は、しばしば価値の評価と関連しており、肯定否定の極性およびその極性がどの程度であるかという強度の二つのパラメーターによって決定づけられる。感嘆文の使用においては、肯定または否定の価値が付与され、それと同時に強弱のパラメーターの機能も働く。実際の会話においてもそれら二つのパラメーターの両方が働いていることが多く認められる。

話者の感情を表す言語行為では、いくつかのタイプの談話的ニュアンスを組み合わせることができる。例えば：

例 4 : 「男性が自分の父親に婚約者を紹介する」という文脈：

- « N'est-elle pas la plus belle? »を使用する場合、二つの談話的ニュアンスが現れる：
 1. 父親に向けた感情的表現
 2. 婚約者に向けたお世辞。この場合では、婚約者が間接的な対話者 (interlocuteur indirect et latéral)

例 5 : 「話者は大統領のスピーチを聞き、対立的な感情を抱く」という文脈：

- « Je n'en reviens pas ! » を使用する場合、二つの談話的ニュアンスが現れる：
 1. 話者の驚き
 2. このスピーチの内容対する話者の非賛成の立場

b) 反応性の現象

言語学において、反応性の現象は主に三つの観点を持つ：

- 一つ目の観点は相互作用において。隣接ペアの例に見られるように、各表現の間には反応性の関係がある。例えば、挨拶の文脈で、一つ目の挨拶表現を使用した場合、二つ目の挨拶表現が自然と共起されるといった反応が生じる：

- 話者 A : Salut !
- 話者 B : Coucou !

- 二つ目の観点は社会言語および儀礼的な側面からである。儀礼的表現の使用はそれに対する反応を前提としている。そのような社会的規範が存在するため、発話者は対話者からその表現の繰り返しやそれに対応する表現、すなわち反応がなされることを期待している。仮にその儀礼的返答をしない場合、相互作用の未達成という意味においてコミュニケーションに支障をきたす恐れがある。したがって前の事例を例にとると、挨拶（反応）に答えないという事実は、社会的プロトコルが尊重されていないため、相互作用において不快の状況を引き起こす可能性がある。
- 三つ目はプロセスに関する観点：談話の文脈で生じた出来事や相手の言動に対する話者の感情的反応である。この観点が本研究の興味を引くものである。

この反応性は、規範となる社会的基準や個人的基準に基づいて、その文脈内での事象が評価され反応として生じている。これらの社会的基準および個人的基準は、その事象の善悪や適切さに関して、話者を取り巻く社会や個人的価値観によって築き上げられてきたものだ。話者の評価がこれらの基準から外れ、否定または肯定極性（axiologie）に向かう瞬間から、主観的反応の現象を観察することができる。例えば：

- 肯定極性も否定極性もない場合：「私はラーメンを食べる」->「個人的感覚により味を評価し、その味が普通より美味しくも不味くもない」->「**一般的にリアクションがない**」
- 肯定極性がある場合：「私はラーメンを食べる」->「個人的感覚により味を評価し、その味が普通より美味しい」->「**ポジティブな反応性**」->「la vache ! Ce ramen est bon !」と言える。
- 否定極性がある場合：「私はラーメンを食べる」->「個人的感覚により味を評価し、その味が普通より不味い」->「**ネガティブな反応性**」->「Putain! Ce ramen est mauvais !」と言える。

興味深いことに、フランス語で「réagir」という「反応する」意味がある動詞は、場面についての話者の感情や意見を表す表現として使用することができる。したがって、一般的にフランス語では次のような文例の使用が観察できる：

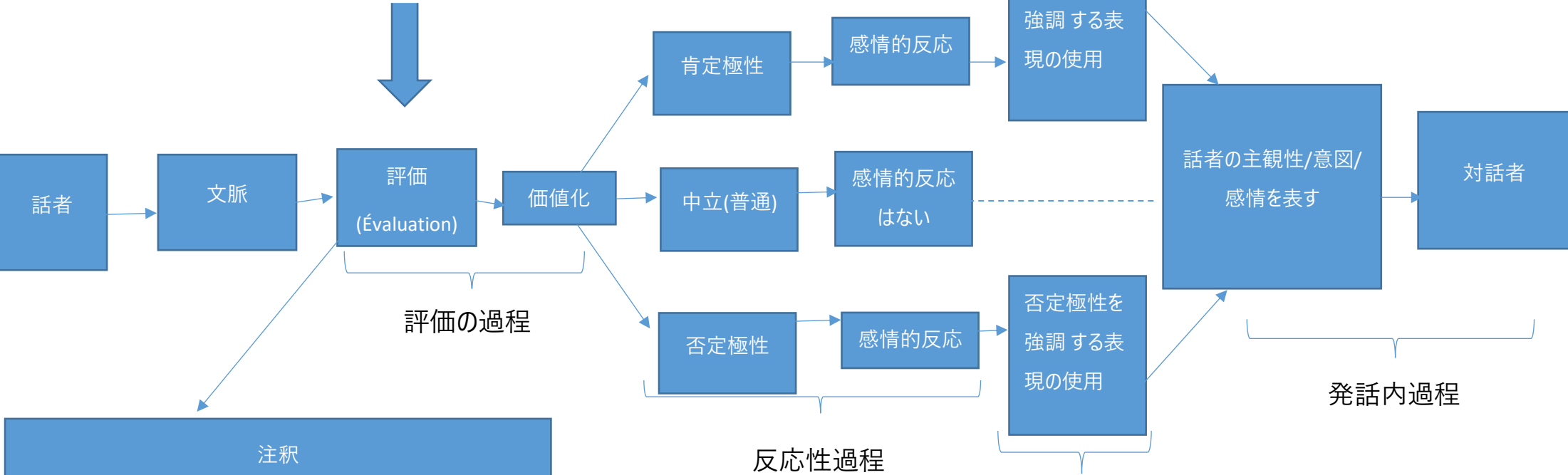
- « *Concernant la réunion d'aujourd'hui, j'attends vos réactions (= avis, idées, etc.) par mail* »

- « *Je vous demande de réagir (=donner votre avis, exprimer ressenti) après le discours du président, merci* »
- « *Le livre a reçu de mauvaises réactions (mauvaise évaluation, avis négatifs) de la part du public* »

そのため、言語学において反応性の現象は主観的表現の現象と密接に関係していると思われる。

驚きを表す定形表現の使用における認知過程

一般知識 / 専門知識 / 個人的知識 /
社会的共有知識に基づく



注釈

a) フランス語における様々な評価に関する概念

Appréciation / estimation / examen / expertise

b) 英語における様々な評価タイプ

Valuation / Appraisal / Assessment / Estimation / Examination

c) 日本語における様々な評価タイプ

価格 / 換価 / 鑑定 / 査定 / 値踏み / 評定 / 判定 etc...

この場合、様々な評価タイプへの分類化の可能性がある

V. 使用した分析方法

1. コーパス

本研究では、三つの参照コーパス（口語コーパスが一つと文語コーパスが二つ）と二つの SNS コーパス（Twitter と Facebook）に基づいて分析を行った。SNS というのは、通常多くの言語行為が口語的文体で行われる「un lieu privilégié de l'écrit oralisé」である。また、現在の口語コーパスでは、語用論的定形表現を十分に網羅していないため、SNS を使用しその参照コーパスを補完した。以下の表は使用したデータの概要である:

	コーパスのタイプ	言語	ボリューム（時間/言葉）	参照元
Frantext	文語	フランス語	2 億 5300 万	https://www.frantext.fr/
Lexicoscope	文語	フランス語	3400 万	http://phraseotext.univ-grenoble-alpes.fr/lexicoscope/
Orfeo	口語	フランス語	450 時間/ 400 万	https://www.projet-orfeo.fr/

2. データ抽出方法

分析で使用する抽出物を特定するために、以下の方法を用いた。:

- 1) まず、研究対象である表現すべての形態論、統語論に関する変化のリストを作成した。
- 2) 次に、これらの様々なバリエーションをコーパスの検索ボックスに入力し、結果を Excel または PDF ファイルでエクスポートした。
- 3) さらに、この研究に関連がある表現を含むサブコーパスを作成するために、そのデータを分別した。その際、抽出物の談話的および価値論的要素を説明できるように、明確に識別可能な文脈を持つように細心の注意を払った。
- 4) 最後に、生産性の比率を算出するために、EXCEL でこの表現の出現を計測し記録した。

3. 文例の分析表

この分析では、統語論、意味論、語用論、および相互作用などに関するパラメーターを設定し、を語彙的特徴を特定した。研究に使用した基準は以下のとおりである：

Syntaxique 統語論	Sémantique / lexicographique 意味論 / 語彙論	Pragmatique 語用論	Interactionnel 相互作用
<ul style="list-style-type: none"> 品詞の分類 形態論的バリエーション 統語論的自律性 複数語彙の出現 統語論的関連テスト (ユニット挿入、補語挿入、代名詞の変化、ジェンダーや複数形変化、テンス変化など) =figement のテスト 	<ul style="list-style-type: none"> 言語変種 言い換えと意味等価 意味の構成 (意味の figement を測る) ダイクシス(直示理論)の痕跡 多義 (文字通りの意味と比喩的な意味) 共起する言葉 	<ul style="list-style-type: none"> 言語行為 会話の中でどんな語用論的及び相互作用機能があるか 発語内機能 	<ul style="list-style-type: none"> 対話が独り言か スピーキングターンの順番に影響がある? コミュニケーション状況の種類 発言者と対話者間の関係の痕跡(人間関係、内対外(日本語のみ)、感情的距離)

VI. コーパスから導き出された事例の分析

以下、コーパスから導き出された興味深い特徴を明らかにするために、驚きを表す語用論的機能を持つ下記定形表現の事例を分析する。

→「On croit rêver」について

「On croit rêver」という表現は、話者の驚き、落胆、または憤慨を表現する際に使用される評価的表現である。多くの場合、この表現は否定的な状況に対する話者の主観的反応を強調する。

a. コーパスの文例

- « Dans son dernier discours, Hitler invoque la providence et le seigneur qui le protège dans sa croisade idéaliste. On croit rêver... Que le führer soit de bonne foi ou non, on imagine mal un dieu protégeant tant de forces mauvaises [...] »
[Simonne Collin, « Sensible girouette (naïveté et jobardise d'une française de la zone libre pendant les années 40) », 1968 p.125, Frantext]

→ ヒトラーは自分のイデオロギーを正当化するために聖典を引用し、自分の言動は神の加護の元にあるとした。それに対し話者が主観的に反応する。

2. « On croit rêver en entendant Christian Estrosi parler de "souponne" à propos d'un appartement de 70 m² dont il dispose gracieusement dans un hôtel particulier à Paris. »

[Jérôme Bathémemy, Le Monde, 06/06/2014, Lexicoscope : Presse]

→ 政治家が自分の住んでいるアパートは小さすぎると文句を言うが、実際のところ彼は 70 m² の非常に高級なアパートに無償で住んでいる。それに対し話者が主観的に反応する。

4. « Alors que les blessés s'accumulent durant les manifestations #GiletJaune et que les gens meurent dans la rue, on veut nous faire pleurer sur le sort de @EmmanuelMacron?! On croit rêver! »

[Tweet d'Irène Costelian, le 31/03/2019, Réseau social Twitter]

→ 最近の「Gilets jaunes」というデモでは、たくさんの負傷者が出た。しかしマクロン大統領は、彼の生活条件は非常に困難で痛みを伴うという文句を言った。そのような文句に対し、話者が主観的に反応する。

5. « 4ème victoire d'affilée, 1 point du podium, on croirait rêver #ACAFCN #TeamFCN »

[Tweet d'Hugo David, le 19/10/2013, Réseau social Twitter]

→ サッカチームが優勝するらしい。話者は喜び反応する。

6. « Le deuxième but de Mbappé part de Lloris et en 5 passes on arrive au but... On croirait rêver. Allez les gars »

[Tweet de Memphis, le 30/06/2018, Réseau social Twitter]

→ Mbappé 選手と Lloris 選手は試合中 2 点目をゴールした。話者は熱意をもって反応する。

有用な語彙 :

- **Invoquer** : ~を引き合いに出す、援用する
- **Bonne foi** : 誠意、善意

- **Soupe** : petite pièce conçue pour le rangement / appartement petit et modeste (métaphore)
- **Disposer** : 自由に使える
- **Gracieusement** : 無料で
- **Pleurer sur le sort de** : 他者の深刻な状況に気づき悲しさを感じる
- **D'affilée** : 連続して、一気に
- **Podium** : 表彰台

b. 統語論的特徴

これらの表現構造は、不定代名詞、または直説法動詞「croire」と不定形動詞「rêver」を含めた動詞句で構成される。コーパスで識別された形態統語論的な変形：

- Je crois rêver: 代名詞変形 (1^{re} pers.sg.)
- On croirait rêver: モダリティ変形(条件法)
- Je croirais rêver: 代名詞とモダリティ変形
- Je dois rêver: 代名詞変形と「croire」の動詞変形

この表現の構造は統語的に自律している。ただし分析したコーパスでは、この驚きを表す表現は、これらの表現の使用に関係している状況を説明するための補語と繋がっている可能性が高いと思われる。この表現に関係する状況補語の統合は以下を使用して行われる：

接続詞:

- Quand : *On croit rêver quand un député rapporteur d'un projet de loi [...](ref)*
- Lorsque : *On croit rêver lorsque @p.pradal premier adjoint [...](ref)*

前置詞 :

- De : *on croit rêver de lire cela. (ref)*
- Par : *on croit rêver par tant de condescendance. (ref)*
- Devant : *on croit rêver devant tant de nullité (ref)*
- Face à : *on croit rêver face à un tel dirigisme. (ref)*
- En : *[...] on croit rêver en apprenant que le fils de Roselyne Bachelot [...]*
(Lexicoscope s953067)

補語に焦点を当てる倒置：

- *...quand on entend ça, on croit rêver... [...](ref)*
- *À regarder les photos du courrier, on croit rêver. [...](ref)*

動詞テンスの変化：この表現は条件形で使用される場合があり、表現の主観的モダリティを補強する：

« on croirait rêver ! Campagne anti #IVG à #Paris - 2017 En plus on comprend rien aux affiches, félicitations au DA. »

[Tweet de Luigi, le 17/01/2017, Réseau social Twitter]

この表現の語順は統語論的に制約されていない（figement）、この表現のユニットの組み合わせは柔軟である。：この表現では言葉の挿入や動詞テンスの変化、代名詞変形も行われる可能性がある。

c. 意味論的および組み合わせ論的特徴

意味の観点から言及すると、これらの表現は現実に対してある種の疑問を呼び起こしているように思われる。その文脈における出来事が夢かと錯覚するほどの強い驚きがあるため、話者は発話の状況とそこにある事実に対し疑問を持ち、それらの真偽を再検討する。この表現では夢の非現実的な性質を使用した隠喩の要素がある。これらの特徴を踏まえると、現実の事態を表現するために使用されるとき、その表現は以下を強調することが出来る：

- 話者はこの出来事が現実離れしているという評価をして、この文脈における出来事には真実性を認めることができない（現実否認）
- この文脈における出来事が信じられないほど嬉しくて、話者がこの出来事について「夢ではないか」または「本当に現実か」ということを再検討する。

この表現は日常会話においてしばしば使用されている。この表現は一般的に話者の感情を表す句読点と結び付いている：

- 感嘆マーク: *On croit rêver !*
- 疑問マーク: *Non, mais on croit rêver ?* (ref)
- 断定マーク: *On croit rêver.* (ref).

さらに、コーパスで識別された様々な事例では、中断符 '...'の使用に重要な機能²がある。この句読点は話者が無理解、憤慨、または落胆の感情を表現したい場合に頻繁によく使用する。この句読点を使用して、話者は文脈によって対話者に意図を伝えることができる。また、談話の目的をも表すことが可能である。このようにして、句読点は主観的モダリティを強調する。例えば：

(予算削減による貨物列車の路線廃止に伴う人員削減のお知らせ)

« Peut-être que la région fleuron de l'industrie aéronautique va envoyer ça [=le fret des trains] avec par avion :) Plus sérieusement, on croit rêver... »

[Tweet de Nicolas Baylé, le 31/03/2019, Réseau social Twitter]

この表現は、慣用表現の言語カテゴリーとしては意味は予測出来ず、その表現の理解は運用状況に託されている。この表現の意味はこれらを構成する単位の意味論的特徴の組み合わせからは汲み取ることはできない。したがって、ネイティブではない人が表現を構成している単位のそれぞれを翻訳しても、この表現の意味および語用論的使用を理解することは容易ではない。

「夢」という名詞は基本的に非常に主観性が強い概念である。夢は個人的なものであり、それは十人十色である。個人の気質や、個人的知識、経験を通して「夢を見る」という認識過程をたどっている。そのため、夢は基本的に主観の媒体である。その意味において「夢を見る」という概念は本質的に主観的であり、そしておそらく価値論的である。その夢の内容によって、「いい夢」(valeur positive)か「悪い夢」(valeur négative)を見ることが出来る。Kerbrat-Orecchioni (1999) が説明しているように、「夢を見る」のような語彙単位は強い主観的な可能性を持っている（精神活動に関連している多くの用語にその特徴が観察出来る）。また、表現の意味はポジティブかネガティブかの評価によって、様々な感情的な価値を持つことが出来る（déformabilité）。例えば、「夢を見る」の場合では、その表現は、否定的な驚きや落胆を表現することもできれば、肯定的な

² [...] Les points de suspension sont des dispositifs multimodaux qui se situent à l'interface entre différents niveaux de lecture et d'analyse. [...] Leur caractère performatif entre sémantique et sémiotique (en marquant typographiquement la pause, ils font suspension) octroie à cette entente mutuelle l'esquisse d'une normativité sous-jacente, fruit d'une co-élaboration de questionnements et de positionnements. [...] L'intentionnalité du locuteur devient un facteur déclenchant pour l'interprétation de ces points. Ils deviennent des outils d'intériorisation de cette intentionnalité et procurent au discours une nouvelle orientation modale en invitant à l'activation d'un système de pensée en-dehors de l'énoncé lui-même. (Seoane, 2016)

驚きや話者の喜びを表現することもできる。対話者は文脈からの情報により、その表現の感情的価値を解釈することが出来る。

夢を見ているという認知過程はそれ自体ある種の意味的な *déformabilité* (Mélis2013) があるため、話者が「驚き」を感じるという状況において非常に特別な意味を与える可能性がある。夢という概念には根本的に主観的性質があるため、文脈の意味を変化させる機能を持ち得る。したがって、文脈は「on croirait rêver」という語用論的機能表現の解釈にとって非常に重要である。

さらに、この表現にはしばしば強調副詞や補強表現が伴うことが観察出来る：*vraiment*, *on croirait rêver* / *sérieusement*, *on croirait rêver* / *c'est pas possible*, *on croirait rêver* / *on croirait rêver putain*

統計的に出現の高い共起：

表現の前	表現内	表現の後
<ul style="list-style-type: none"> • <i>non, mais on croit rêver !!!!</i> (ref) • <i>pincez-moi on croit rêver</i> (ref) • <i>euh... on croit rêver, c'est une blague ?</i> (ref) • <i>sérieusement on croit rêver...</i> (ref) • <i>sans blague, on croit rêver [...]</i> (ref) 	<ul style="list-style-type: none"> • <i>on se croit rêver !!</i> (ref) • <i>on croit même rêver des fois</i> (Lexicoscope s6744) 	<ul style="list-style-type: none"> • <i>on croit rêver là !!!</i> (ref) • <i>non, mais on croit rêver quoi ! [...]</i> (ref) • <i>on croit rêver des fois...</i> (ref) • <i>on croit rêver parfois.</i> (ref) • <i>non, mais on croit rêver ma parole... [...]</i> (ref) • <i>[...] On croit rêver ou quoi [...]</i> (ref) • <i>On croit rêver sérieusement [...]</i> (ref) • <i>Non, mais On croit rêver sérieux [...]</i> (ref) • <i>euh... on croit rêver, c'est une blague ?</i> (ref)

これらの共起の中では、肯定的な意味と否定的な意味または発話内行為を強調するといういくつかの特徴を持っていると思われる(« *non mais* », « *quoi !* », « *ma parole !* »)。さらに、これらの共起のいくつかは「on croirait rêver」という表現の直示的定着(ancrage déictique)を強める。例えば: « *pincez-moi !* » (話者の体), 所有代名詞 « *se* » (話者), 不定代名詞 « *on* » (代名詞変形 « *je* » でも), 前直詞 « *là* » (場所か時間), 反復の副詞 « *des fois* » et « *parfois* » (時

間) など。最後に、この共起の中では、「現実離れた文脈を信じられないため再検討する（肯定または否定の意味で）」という話者の心的態度を強調する機能があると思われる。以下のユニットではその特徴を観察することが出来る：« *pincez-moi* », « *sérieusement* », « *sérieux* », « *c'est une blague* » (存在を確認する)。

d. 語用論的で談話的な特徴

I. 感情を表す言語行為:

1. 話者の驚きを表す(肯定または否定の意味で)
2. 話者の不満、落胆、および憤慨を示す

II. 発話内の言語行為

1. [発言、行為、態度、出来事] に賛成または非難する
2. [発言、態度、出来事] の正当性(符合性、妥当性) を認める

この表現は、文脈に現れた[発言、行為、態度、出来事]に対する反動的な独り言および対話である。それぞれの文脈に現れた[発言、行為、態度、出来事]は、発言の瞬間に必ずしもその場に存在しないであろう話者によって為されたものである。

例えば、「Twitter」コーパスの場合では、驚きの表現の使用は、発話の瞬間には起こらない出来事、発言、スピーチ、指摘または行動に対して行われることが多い。そのため、反応過程には必ずしも、[発言、行為、態度、出来事]が存在した瞬間 と同時性があるとは限らない。反応とその反応の原因の同時性は、*in praesentia*³ の相互作用においてのみ見いだされる。

この表現の使用は、話者の感情的な反応の起源を表すシーケンス（一般的にその補語は前置詞、または接続詞によって差し込まれる）によって前後することがよくある。更に、この表現は文脈の状態に直面している話者の心的態度を表しており、価値論的強調を行う。

独り言の場合では、反応の原因を表すシーケンスがしばしば驚きの表現の使用を伴うことが観察できる。対話の場合では、発言の瞬間に存在している対話者がこの反応の原因であれば、話者の反応の原因を表すシーケンスは発言していないと観察出来る。発話の文脈が対話者によって同時に共有されているので、説明をするというのは不自然となる。

³ En présence de(s) l'interlocuteur(s)

日本語では機能的同等表現を観察できるのか？

フランス語の驚きを表す語用論的定形表現の分析の流れで、日本語に機能的同等物があるかどうかを尋ねるのは興味深い。もしそうなら、これらの機能的同等表現がフランス語の表現と同じ発話内行為を表現するのだろうか。さらに、これらの機能的同等表現の統語論的、談話的および意味論的機能について研究することもまた非常に興味深い。このように対照的な分析に基づき、驚きを表す機能を持つ語用論的定形表現の普遍的なカテゴリー化に貢献することも可能であろう。以下の日本語表現は、研究対象としたフランス語表現と同等機能を持つという仮説を立てたとする：

- a) 信じられない
- b) 嘘でしょう!
- c) 冗談でしょ(う)
- d) 本気(なのか)
- e) 本当かよ
- f) 夢(じゃないか)/(みたい)

この博士研究では引き続き、以下の複数コーパスに基づいて上記の日本語表現の詳細な研究を予定している：

	コーパスのタイプ	言語	ボリューム（時間/言葉）	参照元
日本語日常会話コーパス	口語	日本語	200 時間以上	https://pj.ninjal.ac.jp/conversation/
中納言	文語(フォーラムとブログのサブコーパス)	日本語	およそ 5000 万	http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/
Corpus <i>Jibiki</i>	文語 映画またはドラマの字幕	日仏語	およそ 300 万	https://jibiki.fr/cgi-bin/corpus/corpus.pl?lang=fra

暫定的な結論

結論として、コーパスによるデータ分析により、研究の目的に対する認識がより明確なものとなった。特に、私たちの驚きを表す語用論的定形表現の使用に関わる価値論的評価過程は、予想よりも複雑と思われる。つまり、研究対象となった様々な語用論的定形表現の構造は話者の主観性と意図の多くの要素を持ち合わせていることを意味している。分析した事例全てで、意味の理

解というのは文脈と話者と対話者の共有されている知識に密接に関連していることが観察できた。しかし本研究で解明できたのは数多く存在する疑問の一部であり、まだまだ研究の余地が多く残されている。

VII. 次の研究展望:

- この研究の続きとして、これらの表現の辞書式的記述を提案する（特に Pragmalex プロジェクトの文脈で）。
- この研究のモデル化に基づいて、語用論的定形表現の他のパラダイムを調査する。
- 日本語の機能的同等表現は実際にフランス語の表現のように機能しているか？ → 詳細な対照言語的分析を行う。
- これらの表現の相互作用的機能を観察するために、コーパスで更なる事例を研究する。
- 研究展望の理論（モダリティ、主観性、価値論、日本語対照言語的な観点）を深めて、この言語構造のより詳細な解明をする。
- この研究の続きでは、評価の概念を明らかにし、様々なタイプの評価の類型論を提案する。

参考文献

- Annabelle Seoane. Les points de suspension dans Le Canard enchaîné ou l'implicite au croisement du pré-, du post-, du méta-et de l'infra-discursif. *Signes, Discours et Sociétés : Revue semestrielle en sciences humaines et sociales dédiée à l'analyse des Discours*, Université Galatasaray, 2016, 17
- Anscombre, Jean-Claude et Ducrot, Oswald, 1976, « L'argumentation dans la langue », *Langages*, 42, p.5-27.
- Benzitoun C., Debaisieux, J.-M., Deulofeu, J. Le projet ORFÉO : un corpus d'étude pour le français contemporain, *Corpus* 15, Actes du colloque Corpus de Français Parlés et Français Parlés des Corpus.
- Bourcier, Danièle, et Oswald Ducrot, éd. *Les Mots du discours*. Le Sens commun. Paris: Editions de Minuit, 1980.
- Catherine Kerbrat-Orecchioni 1981: *L'illocutoire*, Lyon: PUL.
- Catherine Kerbrat-Orecchioni, *Les actes de langage dans le discours*, Paris : Nathan [rééd. A. Colin, 2008
- Cavalla C.. *La phraséologie en classe de FLE*. Les Langues Modernes, 1- 2009
- Culioli, Antoine, 1990, *Pour une linguistique de l'énonciation, Opérations et représentations*, tome 1 (Collection *L'Homme dans la langue* animée par Janine Bouscaren), Gap, Paris, Ophrys.
- Ducrot, Oswald. « Illocutoire et performatif », *Linguistique et sémiologie*, n°4, 1977, p.17-53
- Ducrot, Oswald. « Les actes de langage », *Sciences*, n°60, 1969, p. 8-13.

- Ducrot, Oswald. *Dire et ne pas dire: principes de sémantique linguistique*. 2e éd. corr. et augm. Collection Savoir. Paris: Hermann, 1980.
- Gérard MELIS, « Les enjeux de la notion d'ajustement : pour une pragmatique intégrée radicale », *Epilogos*, 3, 2013, *L'ajustement dans la TOE d'Antoine Culioli*
- Hanae Koiso et al., Construction of the Corpus of Everyday Japanese Conversation: An Interim Report, rapport du NINJAL sur le corpus oral spontané de japonais CEJC
- Jitwongnan Jarukan. L'analyse des adjectifs axiologiques dans les ouvrages touristiques sur la Thaïlande. Thèse en Linguistique. 2014.
- J.R. Searle, *Sens et expressions*, trad. fr. J. Proust, Paris, Minuit, 1982, p. 41.
- Kasper, G. & Blum-Kulka, S., Interlanguage pragmatics: An Introduction. In G. Kasper & S. Blum-Kulka (Eds.), *Interlanguage pragmatics* (pp. 3-17). New York: Oxford University Press, 1993
- Kasper, G., Applied pragmatics. In W. Bright (Ed.), *Oxford international encyclopedia of linguistics*. New York: Oxford University Press, 1991
- Kauffer, M., *Les actes de langage stéréotypés*. Séminaire Délicortal, Université Grenoble Alpes & LIDILEM, mai 2017
- Kerbrat-Orecchioni, C. (1999). L'énonciation de la subjectivité dans le langage (réédition 2009) [en ligne]. Paris : Armand Colin.
- Klein, J. & Lamiroy, B.. *Le figement : unité et diversité. Collocations, expressions figées, phrases situationnelles, proverbes*. L'Information grammaticale n° 148, janvier 2016, p15 – 20
- Maekawa Kikuo, 2007, Kotonoha, the Corpus Development Project of the National Institute for Japanese Language, rapport du NINJAL sur le Corpus Kotonoha
- Mathieu Mangeot (2016) *Collaborative Construction of a Good Quality, Broad Coverage and Copyright Free Japanese-French Dictionary*. International Journal of Lexicography 2016
- Mel'čuk, I., *Phraseemes in Languages and Phraseology*, Linguistics Idioms: Structural and Psychological Perspectives, New York:Psychology Press, 1995, p 167-232
- Olivier Kraif. Le lexicoscope : un outil d'extraction des séquences phraséologiques basé sur des corpus arborés. Cahiers de Lexicologie, Centre National de la Recherche Scientifique, 2016, Phraséologie et linguistique appliquée, 1 (108), pp.91-106.
- Pierrot Alain, « Oswald Ducrot et l'analyse pragmatique », *Le Débat*, 1980/6 (n° 6), p. 77-78.
- Searle, John R., et Daniel Vanderveken. *Foundations of Illocutionary Logic*. Cambridge: Cambridge Univ. Press, 2009.
- Trotter,D., Bozzi,A., Fairon, C., (éd.), L'évolution de Frantext : quelles modifications et quels usages pour un Frantext 2 ?, Actes du XXVIIe Congrès international de linguistique et de philologie romane (Nancy, 15-20 juillet 2013)
- Tutin, A. (2010). Evaluative adjectives in academic writing in the humanities and social sciences. Dans R. Lores-Duenas, P. Mur-Duenas, & E. Lafuente-Milan (Éd.), *Constructing Interpersonality: Multiple Perspectives on Written Academic Genres*. Cambridge: Cambridge Scholars Publishing